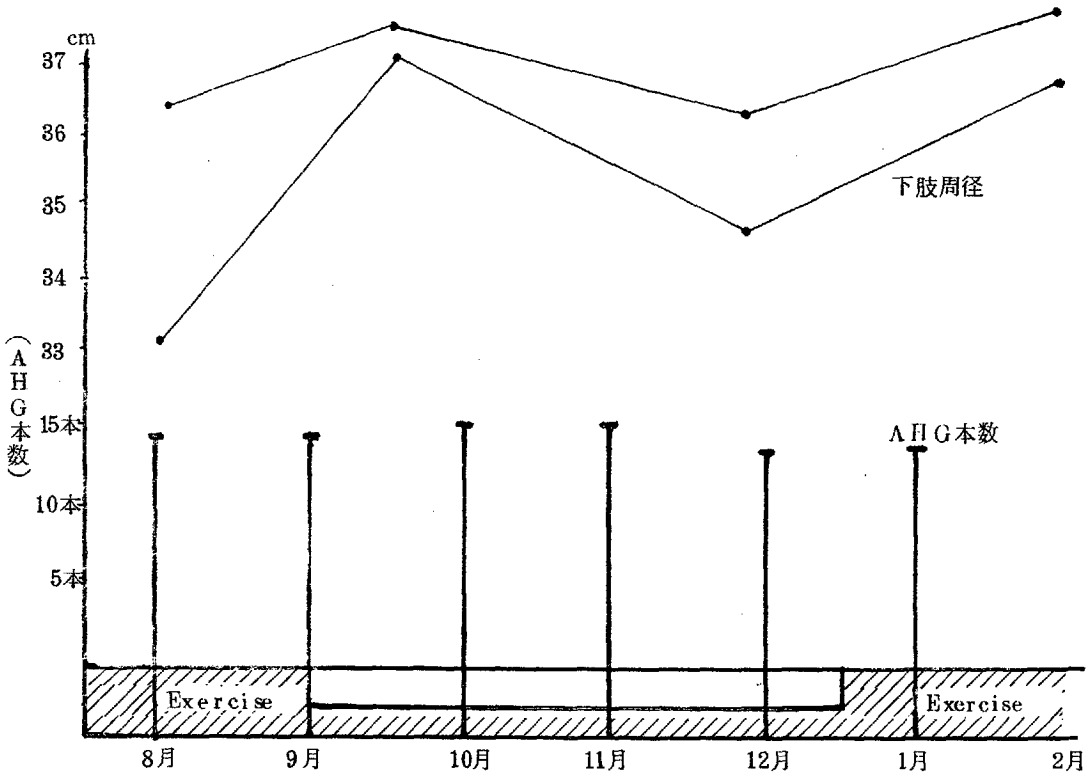

血友病性関節症患児における装具療法の実態と止血効果について

神奈川県立こども医療センター
整形外科　井　沢　淑　郎

血友病性関節症に対する装具療法の効果については、既に再三報告して来たが、今回は装具装着の実態についてアンケート調査を行い、止血効果との関連について検討した。

対象は、現在膝及び足関節の関節症に対して装具療法施行中の患児で、回答を得たものは１側ＬＬＢ装着例７例、１側ＬＬＢ、他側ＳＬＢ併用例、ＳＬＢ装着例１２例（うち両側装着例６例）の計２１例（２９関節）であった。なお対象例の年令は平均8.8才、装具装着期間は平均１8.5カ月であった。

装具の装着状況をみると、ほぼ一日中、全面的に装着しているものは２１例中１２例（57.1％）で、装具の種類による差はみられなかった。

装具の装着を忌避する理由として、装具の重量も無視し得ない（特に靴型ＳＬＢは重いとするも

のが多い）が、それよりもむしろ、「動きにくい」、「取扱いが面倒」、「恰好が悪い」、「変な目でみられる」など、機能的、外見的な問題が実体であった。

装具の装着状況と止血効果との関係をみると、全面的装着例の方が部分的装着例よりも当然乍ら成績は良好で、完全に止血効果の得られたものは、前者では１６関節中９関節、後者では１３関節中４関節であった。装具の種類別では、ＬＬＢ群の方がＳＬＢ群より良好な例が多かった。

学校（幼稚園）における体育及び遠足への参加状況をみると、前者では参加させてくれるものは１８例中１１例（６１.１％）、後者では１８例中１５例（８３.３％）であった。体育においては参加者１１例中９例が種目によって制限をうけているが、これに対する学校側の確たる基準は見当らなかった。

以上の成績より次の結論を得た。

1. 装具療法の成績をより向上させるためには、装着初期における十分な管理、指導が必要である。
2. 装具の軽量化に更につとめる必要がある。　3. 学校における体育指導に関するstandardization の設定が急務と思われる。

多発性血友病性関節症の治療法について

―２関節同時人工関節置換術の経験―

奈良県立医科大学整形外科
増　原　建　二
河　崎　則　之

血友病患者に対する人工骨頭、人工関節などの人工材の使用の可能性については、既に５２年度の当研究班において報告した。

血友病患者における関節出血は一般に多発性であり、したがって、２次性関節症性変化を主体とした病変による機能障害もまた多発性で、単一関節に対する処置だけでは解決しない。

Houghton & Dicksonは、人工関節置換術は、complicationの率が高いので、固定術を行った方が安全であり、かつ欠乏因子の補充量も少なくて良いと報告している。

しかし、多発性に関節の侵される血友病患者には、できるだけ固定術は避け、動きを残してやることが大切であると考え、多発性に強度の機能障害があり、日常生活に多大な支障をきたしていた成人血友病患者２例に対して、人工関節置換術を実施した。

症例１．４７才男　血友病Ａ（FⅧ＜１％）左膝関節、右足関節の関節症性変化は高度で、歩行能は１５分以内に制限されていた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

血友病性関節症に対する装具療法の効果については、既に再三報告して来たが、今回は装具装着の実態についてアンケート調査を行い、止血効果との関連について検討した。

対象は.現在膝及び足関節の関節症に対して装具療法施行中の患児で、回答を得たものは1側LLB装着例7例、1側LLB、他側SLB併用例、SLB装着例12例(うち両側装着例6例)の計21例(29関節)であった。なお対象例の年令は平均8.8才、装具装着期間は平均18.5ヵ月であった。